

第4章

佐藤栄作内閣期の昭和天皇「皇室外交」

——一九七一年訪欧の政策決定過程を中心に

舟橋 正真

はじめに

一九七一年昭和天皇の「ご訪欧」といわれる天皇初の外遊は、アンカレジ経由でデンマーク（非公式）、ベルギー（公式）、フランス（休養）、イギリス（公式）、オランダ（非公式）、スイス（休養）、西ドイツ（公式）への国際親善訪問であった。この訪欧は、佐藤栄作内閣や宮内庁の演出もあり、第一に昭和天皇にとって皇太子時代から五〇年目の旅、第二に昭和天皇・皇后初の海外旅行という感傷ムードを全面的に押し出すものであった。

しかし、そうした日本政府の演出が必ずしもすべての訪問先で通じることはなかった。昭和天皇は、各国で激しい抗議を受け、メディアもジャーナリストの児玉隆也の言葉を借りれば「軍事的侵略から経済的侵略の象徴に変貌したにすぎないヒロヒトの残像を描いた」^{〔1〕}。

これまで先行研究では、こうした天皇訪欧の様相が検討されてきたが、未だ空白も多い^{〔2〕}。天皇訪欧が、政府の一部で極秘に計画されていたことはわかっているが、政府内のコンセンサスがどのように形成され、どのようなプロセスで決定していくのか、は十分に解明されていない。また水面下の訪問国との折衝がどのようにすすめられ、い

かなる問題が生じていたのか、についても未だ明らかになっていない。

次に天皇訪欧と政治の関係については、佐道明広が、天皇訪欧が佐藤の善意から発想されたことを重視し、政治利用の側面は極めて少ないと分析した。⁽³⁾これに対し、高橋紘は、宮内庁が「答礼訪問」という天皇訪欧の大義名分をつけ、そうすることで佐藤内閣に政治利用されない状況をつくったという裏話を紹介した。⁽⁴⁾一方、五十嵐暁郎は、高度経済成長による開発志向が伝統主義や保守主義に対して優先され、結果として天皇や皇室への関心が低下した状況を天皇訪欧で歯止めをかけ、さらに内政面・外交面で行きづまる保守政権が人気を回復させる手段として天皇訪欧を利用したと大胆な分析を加えたが、⁽⁵⁾対内的な利害のために天皇訪欧があったか否かは、推測の域を出ておらず疑問が残る。

当時、昭和天皇と佐藤の関係は、内奏と御下問の継続を通じて「君臣情義」のような意識が形成され、昭和天皇は「保革対立に揺れる保守政権を励まし」、「保守政治の精神的核のような存在であった」と指摘されている。⁽⁶⁾そうした関係にあった佐藤が天皇訪欧を政治利用しようとしたとは考えにくく、この説を踏まえて再検討する必要がある。

そこで、本章では、天皇訪欧をめぐる政治力学を検討し、その歴史的意義を解明することを目的とする。その際、キーとなる天皇外遊の政治的、あるいは政治利用という言葉については、天皇外遊が憲法上の国事行為に該当しない公的行為と解釈される政治色の強い行為であることを重視し、この広義の政治性を帯びる天皇外遊が、どのような決定のもと実現していくのかに注目したい。その上で、昭和天皇と佐藤の関係に加えて、訪欧に関わった首相官邸、外務省、宮内庁の関係をもとに、前史として天皇外遊が模索される時代（一九六〇年代）を概観し、天皇訪欧の極秘計画、訪問国との折衝の一過程、そして天皇訪欧の実相を解明しつつ、日本政府における天皇訪欧の位置づけを分析する。

以上は、一九七一年の天皇訪欧という天皇のいち外遊を検討するものであるが、この訪欧が次の外遊となる一九

七五年の訪米にどうつながっていくのか、さらに象徴天皇制下の天皇外遊にどのような意味をもったのか、その歴史的意義の解明を試みる。

なお、本章では、刊行史料や新聞・雑誌だけでなく、外務省外交史料館蔵の外交記録、さらに筆者が「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」（情報公開法）に基づき、外務大臣および宮内庁長官に開示請求し、開示決定を受けた行政文書などを活用する。

一 一九六〇年代における昭和天皇外遊の模索

戦後、昭和天皇が外遊できない状況下、一九五三年に明仁皇太子は、エリザベス女王の戴冠式出席のため訪英し、同時に欧米各国を外遊し、「新生日本」を象徴する役割を果たした。^⑦この外遊に際しては、法的根拠をめぐって政府・宮内庁は、「公事」という概念を採用し、以後、それが国事行為と私的行為の中間的な公的行為の原型となった。^⑧

一九六〇年、皇太子の「皇室外交」は訪米を機に本格化していく。皇太子夫妻訪米は、岸信介内閣で計画され、続く池田勇人内閣において同年九月二日から一〇月七日にかけて、日米修好百年との大義名分で実施された。^⑨

この訪米後、皇太子夫妻は、天皇の名代としてイラン、エチオピア、インド、ネパールへの外遊を続けた。當時は、天皇が外遊できる法律がなく、名代として外遊する皇太子は、天皇外遊と同等の重みをもって相手国に受け止められていた。^⑩

同年末、宮内庁の入江相政侍従（当時）は、「東宮様も方々へおいでになり一生懸命やつていらつしやる。お上の御風格も世界の人に見せてやりたいが、早くしないと段々お年を召してしまふ^⑪」と日記に記した。皇太子外遊が成果を収めるなか、昭和天皇の年齢を鑑み、そろそろ天皇に外遊を、という思いが側近としてあったことが窺える。